０歳から15歳までを一体的に捉えた教育・保育のあり方を考える

A Comprehensive Study on the Support System for Education and Childcare from the age of 0 to 15

川端　義明

Yoshiaki Kawabata

はじめに

2021年度、中学校においても新学習指導要領が完全実施された。これで、０歳から15歳までの保育・教育の指針が示され、生涯にわたって「生きる力」を培うために必要な資質・能力を踏まえた系統的な教育活動が行われることになる。関係法令の改訂を踏まえた教育・保育のあり方の視点から考えてみると、2018年度に　幼稚園、保育園、認定こども園のすべてが「幼児教育施設」として位置づけられ、「幼児教育において一体的に育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』」が共通のものとして明示され、幼児教育・保育の質の向上、３歳未満児保育の充実や養護の重視も挙げられ、乳幼児期の教育・保育の重要さが改めて示された。そして、「10の姿（小学校教育にも引き継がれるべきもの）」は、５領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）に基づく教育によって育まれ、遊びを通しての総合的な指導となることも明確になった。

また、2020年度に小学校、2021年度より中学校で新学習指導要領が完全実施され、３つのキーワード「資質・能力」「カリキュラムマネジメント」「主体的・対話的で深い学び」によって改訂の方向性が示され、それに基づいて学校教育が営まれている。それは幼児教育においても同様である。

こうした状況下、校園長、小中学校教諭として、バックキャスティング（「目指す子どもの姿」を起点として「今」何をすべきかを考える）思考で直接４歳児から15歳までの子どもたちに関わってこられたことは、教育者として大きな財産であり貴重な経験である。子どもたちの健やかな成長を願い、職場の先生方、保護者や地域の方々と一緒になって教育活動に携われたことを幸せに思う。この経験の一端を文字に起こし、書き留めておくことで、小中幼稚園教諭、保育士を目指す学生、現場で活躍されている先生方にとって、発達段階における子どもの姿や指導方針の共有、乳幼児期の保育・教育と小中学校教育の円滑な接続のための一助になればと願う。本稿では特に、勤務地である豊岡市の教育プランに基づいた校園長の立場からの実践を中心に、今後求められる０歳から15

歳までを一体的に捉えた系統的な教育・保育のあり方を３つの視点から考察する。

子どもの事実（エピソード記録）を基にした幼児期の保育・教育の視点

ここでは、遊びを通して行う教育･保育の視点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、資質・能力の３つの柱を常に意識し、幼児の遊びや生活の中にその姿を明確に捉え、振り返ることによってその学びの姿を支えている環境について考察する。その上で、主体的・対話的で深い学びを促すべく、捉えた要素を次の環境の構成に生かせるように考えた。環境の構成の工夫や学びが読み取れるエピソードを可視化することで、求められる資質・能力の育成や指導のあり方を考えた事例を紹介する。

事例　４歳児（年少児 ９人）「やったー！　水が溜まった！」６月

これまでの園児の姿　年長児と一緒にどろんこ遊びをよくしていた。穴を掘って水を溜めたり、川を作ったりする年長児の真似をしたり、側で遊んだり、また違う遊びをしたりしていた。

数日後、「今日はクラスだけで遊ぼう」と話をすると、とても張り切った様子で遊び始めた。砂場には、穴を掘って水を溜めたり、山を作ったりした遊びの形跡が残っており、さらに穴を掘ったり、水を流したりして遊ぶ幼児と山を作って遊ぶ幼児がいた。

エピソード　友だち同士で「いくよー」「おー」など声を掛け合ったり、教師が遊びに加わっていると「先生入れてー」と言ったりしているが、同じ遊びをしているのはわずかな時間で、自分の興味がある方へ行く。

穴を掘っていた幼児達は「今日はプールを作る」と言っていたが、いろいろな場所で穴を掘ったり道を作ったりすることを楽しんでいる。しばらくすると「くっつけよう」「水がこっちにどんどんくるやん」「流れてきたぞ」などの言葉を交わすようになり、遊びがつながっていき、みんながその遊びを始めた。道や穴がある程度掘れてくると、どんどん水を運び、流し始めたり溜めようとしたりしている。役割を決める言葉はないが、それぞれが何となく動いている様子である。しかし、なかなか水が溜まらず、Ａ児が「全然できない」と言って怒り出した。そして「緊急事態」と言い出す女児達。教師は何も言わず、どうする？という表情で幼児達を見る。すると、Ａ児が「人が少ない！」と言い始めた。突然ホールで遊んでいた年長児に状況を伝え、「人が少ないからできない」と話をする。年長児と一緒に遊んでいた時の人数や水が溜まっていった様子がイメージされたのだろう。年長児に話を聞いてもらい少し安心した様子だったため、「次は年長さんと一緒にがんばろうね」と声を掛けたが、「いやだ！絶対に水を溜めたい。前みたいにしたい」とＡ児を中心に声が出る。水を溜めることが目的となったようである。教師が「じゃあ、どうするの？」と声を掛けると「みんなでがんばろう！」「これは子どもチャレンジだから先生はしたらだめだよ！」と言い、全員で水を運び、流し始めた。

水が溜まらない場所は手やスコップで急いで掘りながら、全体に水を溜めようとしている。水を溜めたいという思いが強く、全員の動きが早くなっている。早く水を運ぶことも大切だと気付いた

ようである。小さな道具で水を運ぼうとしている幼児にはバケツがあることに気付けるよう声を掛けた。最後には水が溜まり、自分達だけでできたことにとても満足そうであった。

学びの省察

上記の事例（子どもの事実）から得た学びを、資質・能力の観点で表１にまとめた。

表１　学びの省察

幼児が水を溜めようとする姿から
・年長児と遊んだ時の様子を思い出しながら、なぜ水が溜まらないのかを考える。 ・砂は水を吸うことに気付く。 ・水を運んだり流したりする人数が少ないことに気付き、クラス全員でしたら水が溜まるのではないかと考える。 ・水を溜めるには、砂が水を吸う前に水を加えなければいけないことに気付く。 ・道具によって運べる水の量の違いに気付く。 ・水が溜まった喜びや友だちとの一体感を感じる。
資質・能力育成の観点から
①　知識・技能の基礎（気付くこと・分かること・できること） ・水や砂の特性を捉える。 ・人数や水の量の違いの気付きから、数や量への興味や関心を持つ。 ②　思考力・判断力・表現力等の基礎（考え、試し、工夫する） ・年長児と一緒に遊んだ経験を生かして、水を溜めるための方法を考える。 ・水をたくさん運ぶための道具を考えて選ぶ。
幼児の学びを支えたものは…③　学びに向かう力・人間性等（心情・意欲・態度）
・年長児と遊んだ時の経験を想起し、その遊びをやってみたいという好奇心 ・水を溜めたいのに、うまくいかないことへの気付きや葛藤 ・友だちと一緒に水を溜めたいという目的の共有 ・自分たちだけで最後までやり遂げたいという強い思いと人数の違いの気付き

環境構成のポイント　まずは、クラス遊びの時間を十分に確保する。その際、遊び道具の数を考え、バケツは全員分準備し、目につきやすいところに置く。また、幼児の気持ちに寄り添い、待ったり見守ったりする等、タイミング良く声掛けをすることが大切である。併せて、どの道具を使えば効率よく水が溜まるか、気付きにくい幼児に声を掛け、知らせることを忘れない。

教師の振り返り　年長児の遊びを見たり、一緒に遊んだりした経験から、自分たちだけでやってみようという意欲につながった。年長児と場や時間を共有しながら遊ぶ経験も大切であると感じた。

また、今回の事例では、最初、それぞれ違う遊びをしていたが、次第に同じ目的に向かっていったことから、みんなで一緒にする楽しさを感じることができる経験の積み重ねが、後の人との関わ

りの大切さやおもしろさにつながっていくと考える。このことを通して、非認知能力（やり抜く力・協働性等）を育むには、乳幼児期からの丁寧な対応、応答的な姿勢、温かい受容などがとても大切であることを再認識した。

小学校教育の視点（小中一貫教育含む）

2017年度から３年間勤務したＡ学校園では、小学校と幼稚園が同じ敷地内にあり、小学校長が幼稚園の園長を兼ねていた。そのため、幼稚園教諭も小学校の職員会議に同席し、小学校の教育方針を踏まえた教育が幼稚園でも共有され、４歳児から12歳までの子どもの支援も同一歩調で行ってきた。そのため、就学前教育から小学校教育への移行もスムーズで個の特性を尊重した児童の心に寄り添った教育活動が可能であった。一つ目の視点では、子どもの事実（エピソード記録）を基にした幼児期の保育・教育についての考え方の一端を示したが、ここでは、校園長としての立場から小中一貫教育を含めた小学校教育についての実践例を紹介する。

はじめに

校園長としてＡ学校園に赴任し、学校経営を行うにあたって、常に心掛けてきたことは、子どもを学校、学級の中心に据えた教育、とりわけ授業を核とした学校づくりである。そのためには、新学習指導要領の背景にあるこれからの時代を生きる子どもたちに求められる「確かな学力」を再度捉え直すことで、真に生きて働く「学力の向上」の推進に取り組む必要がある。その上で、改めて教育活動の意味付け・価値づけ（指導に対する子どもの変容と評価）を行い、新たな時代の教育の実現に向けて校長としてのリーダーシップを図らなければいけない。

校長としての具体的な取組　「確かな学力の定着及び学力向上」に向けて

（１）学力観の捉え直し…「確かな学力（学力の３要素から構成される学力）」の捉え

少子高齢化、情報化やグローバル化といった社会的変化がもたらす時代においては、一方的に知識を教えるだけの教育では期待される人づくりはできない。それは、求められる人材育成に向けて、授業で「何ができるようになるか（身に付けるべき資質・能力）」が重要であり、そのためには「何を学ぶか（内容）」に加えて、「どのように学ぶか（主体的・対話的で深い学び、見方・考え方）」が今まで以上に大切になってくる。「社会に開かれた教育課程」を実現し、学校や家庭、地域が育成すべき資質･能力を共有し、連携して、一人一人の子どもの学びを確かにすることが重要であると考える。

（２）授業改善の視点～授業づくりこそが学級経営の基盤～

子どもたちが自立して社会の中で豊かな人生を送るためには、自らが自らを高めていく力を身に付けることが重要である。また「自分は自分の主人公」（東井義雄氏の遺した言葉）この意識と行動を育てるためには、全ての教育活動、とりわけ授業の中で子どもたちを学びの主体者として位置づけていくことが大切であり、その要となるのが子どもたちの指導に当たる職員の幅広い知見と資質能力の向上を図る研修であると考えた。豊岡市が策定した授業における５つの「徹底・継続」実践事項（「めあて・学習課題の提示」「考えを発表する場の設定」「話し合う活動の場面の設定」「書く

活動・活用する時間の確保」「振り返りの活動」）を踏まえた「後半重視型の授業デザイン（筆者作成資料　表２）」を職員に提示することで、日々の研修に活用している。

表２　５つの「徹底・継続」実践事項を踏まえた「後半重視型の授業デザイン」
～主体的・対話的で深い学びを視点とした授業づくり～

展開 （５つの実践事項）		教師の関わり （引き出す言葉掛け）	児童の学びの姿 （自分や仲間との対話）
考えたくなる（知的好奇心）	めあて 【自己決定】	○既習事項を想起させる（「前時に学んだことは…違いは…」）	○既習事項を想起し、解決の方法の見当をつける「今日は～をするのだな」
	見通し （めあてに「見通しの機能」を持たせる）	○見通しを持たせる（「～できそうですか」「どうしたらできるかな」「やってみる」） ①何をやるか②どのようにやるか③何ができるのか　を考えさせる。	○「こんなことができるようになるんだ」「あのやり方でやればできそうだ」「答えは○○かもしれない」「今日はできるかもしれない」
考えを持つ	自力解決 【自己決定】	○個々の思考やつまずきを把握「つまずいている子が多いな」「途中でもいいよ」	○既習の知識・技能を使えないか。 ○生活体験をもとに考える
	発表 【自己決定】	○「どこから【根拠】」「どうして（理由）」「だから（主張・立場）」３Ｄで考えよう	○自分の考えを外化する。 「図や絵を使ってみよう」「前で説明しよう」
考えを広げる・深める	○考えの交流（グループ・ペア活動）…お互いの考えや良さを認め合う ○思考の操作化（考えをつなげ、再構築） 【自己存在感・共感的人間関係】	○「話す」「聞く」意識を高める「途中でもよいので、自分の考えを伝えよう」「理由を示しながら話そうね」「自分の考えと似ているところ、違うところはどこかな」 ○課題解決に向けて思考をつなぐ「どうしてそう思う」「…さんの意見についてどう思う」「図や具体的な例が効果的だったね」「最初と考えが変わったね」	○自分の考えを 3D で発表する。 ○自分と仲間の考えを「比較・分類・関連付け」して「考えあわせ」をする。 ○分かってきたぞ→発言しようか→間違っていたらどうしよう→いいじゃないか ○共感的にうなずきながら聴ける ○交流前の自分の考えと高まった自分の考えをつなぐ（気づき→変容→納得→深まり）

使える	書く活動・活用する場面（適用題等）	○「学んだことを使ってやってみよう」 ○書くことに条件を設定する（字数等）	○適用題で、理解・納得し、学びが定着する。 「分かった」「できた」「やってみよう」
変わる	まとめ（学びを整理・確認）	○子どもの言葉でまとめる 「今日分かったことは」「こんなふうにまとめるといいよ」	○黒板にあるキーワードを使って、なるべく自分の言葉で学びの一般化を図る
	振り返り（学びの自覚・捉え直し）「分かった・できた」【自己存在感】	○「今日の学習はどうでしたか…について振り返ろう」（めあてとの連動） ○「めあてが達成できたのは、皆の力で話し合いが深まったからだよ」（達成感）	○めあてに対する振り返り（自己評価） ○授業の感想に終わらず、学びの変容を実感、自覚（次時への意欲）「最初は…と思っていたけど、友だちの意見でよく理解できた」

（３）小中一貫教育の視点

豊岡市では2017年度より「豊岡こうのとりプラン」として小中一貫教育を位置づけ、２つの視点と６つの柱で９年間の学びと育ちを支え、３つの課題（不登校・学力・特別な支援が必要な子どもたちの教育的ニーズへの対応）の改善と非認知能力を高めることを土台にした取組を行っている。その概略を紹介する。（「第４次とよおか教育プラン2021年度実践計画」（p.39 p.40）「豊岡こうのとりプラン」の概要より抜粋）

ふるさと豊岡を愛し　夢の実現に向け挑戦する子どもの育成
～非認知能力（やり抜く力・自制心・協働性）を子どもたちに～

図１「豊岡こうのとりプラン」基本理念

視点１　系統性と一貫性あるカリキュラムで実践するローカル＆グローバル学習

【ふるさと教育】コウノトリ…小３・５　ジオパーク…小６　豊岡の産業・文化…小４

【コミュニケーション教育】演劇的手法を取り入れたワークショップ（小６、中１）

【英語教育】９年間の系統性と連続性のある英語教育（幼稚園は市独自で実施）

視点２　系統性と一貫性のある寄り添い方で実践する学習指導と生活指導

【授業づくりと学級づくりの一体化】授業における５つの「徹底・継続」実践事項を軸にした「分かる授業」と肯定的な人間関係を構築する学級づくりの一体化

【引継ぎシステムの強化】子どもの声に耳を傾け、願いや課題を共有し、引継ぐ

【家庭・地域との連携】「家庭でしつけ、学校で学び、地域で育てる」を合い言葉

・家庭学習の習慣化（読書活動含む）・睡眠記録票を活用した眠育・情報モラル

上記をベースに、市内の中学校区ごとにグランドデザインを作成し、めざす子ども像や９年間で育てたい資質・能力等、その育成に向けた取組を学校・家庭・地域で共有することで、子どもたちにとって居心地よく学べる教育環境が構築されている。

おわりに

校長の責任は、「全ての子どもたちが安心して自校で学べる教育環境をつくること」そして新しい時代を生きる子どもたちに「『確かな学力』を身に付けさせること」、これらの事実をつくることであると認識する。そこで、子どもたちが予測不可能な時代の変化に主体的に向き合い関与し、その過程で、自らの可能性を発揮し、より良い社会の構成員としての力、自らの人生を豊かなものにできる力を身に付けられる教育課程を構成していく必要がある。また、幼児教育及び小中一貫教育を踏まえた豊岡市の教育の実践の方向として、「なりたい自分になるためにがんばりぬく力（夢実現力）」の育成がある。これらの実現に向けて、児童理解を基盤とした校内研修を核として、多種多様な場面で発揮できる教員個々の実践的指導力及び学校力を日常的に高めていくことが必要不可欠である。多難な時代を生きる子どもたちには夢や目標を持ち続け、人との関わりの中で自分の命を輝かせてくれることを期待する。

乳幼児期の保育・教育と小中学校教育との確かな接続の視点（心身の健康増進）

子どもの育ちや学びを連続的に捉え、小中学校教育との確かな接続を図ることが重要視されている。０歳から15歳までを一体的に捉えた教育・保育のあり方を考える上で、睡眠、運動、そして読書活動（読み聞かせ含む）の３つの柱は、子どもたちの心身の健やかな成長と学びを支える要素として欠かせない。本稿では、「睡眠」と「運動」について筆者のＢ小学校で取り組んでいる効果的な実践事例を紹介することで、学校園での連携は勿論、家庭を巻き込んでの教育・保育のあり方を考える。

眠育（小中一貫教育の取組）

睡眠の大切さは医療での研究が進み、乳幼児期からの夜型生活や質の良い眠りの不足が、脳の睡眠リズム形成不全・睡眠障害・小児慢性疲労症候群ひいては登校しぶり、社会生活不適応など様々な心身の不調につながることが分かってきた。「よい睡眠リズムをつくることが、学力の定着や子どもたちが健やかに成長するための基盤である」と考え、睡眠記録票による生活改善を保護者と連携しながら継続的に取り組んでいる。

ねらい

・より良い生活リズム（睡眠リズム・朝食摂取）をつくり、体や心の安定を図る

・指導時の評価の目安を持ち、生活改善が必要な児童へ個別指導を充実させる

取組内容…学期ごとに２週間実施

（１）児童が「睡眠記録票」に記入し、提出する。（低学年は、保護者と一緒に記入）

（２）「振り返り」は学校で行う。保護者に感想・意見等を記録票に記入してもらう。

（３）担任による個別指導をする。（改善できそうな対策を本人と話し合う）

表３　睡眠記録票のチェックポイント（令和２年度　全校生335人対象）

	チェックポイント	１学期	３学期
①	寝る時刻が目標時刻を過ぎた日が３日以上ある	14.2%	8.1%
②	休日に、平日と比べ90分を超えた日がある【補充睡眠】	22.0%	19.4%
③	帰宅後に寝ている日がある【中途睡眠】	7.6%	2.7%
④	夜中に目が覚めた日がある【中途覚醒】	0.6%	0.6%
⑤	朝食を食べていない日がある	4.2%	3.9%

考察　小中学校の取組が幼稚園にも広がり保護者の協力や理解を得たことで、小学校入学段階で睡眠に対する意識が高くなった。また、年間を通して中学校区一斉に継続的に取り組んだことで、規則正しい生活習慣が確立し、登校しぶりや心身の不調を訴えての保健室利用者の減少という形で、徐々に成果が現れてきている。

運動遊び（幼保小をつなぐ取組）

筆者の勤務地である豊岡市では、平成19年度から保育園、幼稚園や認定こども園で動的な遊びを日常保育に取り入れ、運動遊び担当職員が全園及び子育てセンターなどを巡回訪問し、幼児期における運動遊び事業を推進している。現在では、市内の小学校１年生にも年２回運動遊び担当職員による巡回訪問が行われており、運動を苦手とする子にとっても大変好評で、幼保小の「心と体づくり」の確かな連携がある。以下①～④[1)]は、平成22年度から３カ年計画で「幼児期における積極的な運動支援が子どもの心と脳機能に与える影響」について検証を進めてきた結果を示す。

①運動遊びを実施することにより、脳の集中力を司る領域が活性化した。

②楽しく運動遊びを実施することで、子どもたちの脳機能は向上するが、無理にやらせる運動では、脳機能を向上させるという点では効果が見られなかった。

③運動後に静かな時間を設定すると、さらに集中課題の成績が向上した。

④運動遊びを実施することにより、「気になる子どもたち」の脳活動も向上した。

そこで、こうした運動の効果を持続可能な生活習慣として無理なく教育活動に定着させるための方法を考えた。幼児期の運動遊び事業で培った「力」と「動き」を発展的に取り入れた内容である「豊岡市版小学校体育準備運動」は、全校生で継続して行う。また、独自の取組として、午後の授業開始前に全校一斉に体幹を鍛えるエクササイズと朝の時間に行うリラクゼーションをセットにし、心身の健康増進、ストレス軽減、学びに向かう土台づくりに努めている。以下、エクササイズについて紹介する。

エクササイズ（18項目あるエクササイズを学期ごとに入れ替えて10項目を行う）

つばめ（腹筋強化等）

目でおっかけ（眼球運動）

児童の実態として、ボディイメージが未確立であり、目の動きや体の動きの協調性が不十分であることから、日常的に楽しく体を動かすことで体幹や覚醒レベルを引き上げ、学習に向かう土台づくりを行う。「体幹がしっかりして姿勢が良くなった気がする。」「友だちの話が最後まで聞けるようになった。」と、子どもたちにも好評である。進学先の中学校でも、朝の時間に、同じような取組が行われている。

上記の取組は、筆者も勤務校において大変お世話になった関西国際大学教育学部　学部長　中尾繁樹教授監修のもと、島根県松江市立中央小学校で実践されていたエクササイズを参考にしたものである。睡眠記録票を活用した眠育と併せ、乳幼児期、小中学校の間に「体を動かして遊ぶこと」や「運動すること」、リラクゼーションの方法を生活習慣の一部として身に付けられるような環境（学校園・家庭）をつくっていくことが、生涯にわたり心身の健康を保持する上で大切ではないかと考える。

おわりに

教員生活の大半を中学校で過ごしてきた筆者にとって、初めて幼稚園教育に携わったその年、園児の姿、その成長に大きな衝撃を受けたことが忘れられない。入園式で式辞を読み上げる際、目の前にいるのは、いすに座っていられない子、母親に抱きついて離れず、泣いて顔が上げられない子、集中力が続かず、きょろきょろして落ち着かない子どもが大半であった。その子どもたちが、園での教育を受けた一年後の入園式では、在園児として新入園児を後ろでしっかりと見守る姿となってそこにいた。教育のすごさを見せつけられたような気がした。同時に、教育に携わる者として責任の重さを実感した瞬間でもあった。小中一貫教育を含めた小学校教育、幼稚園教育を中心に述べてきたが、乳幼児の保育のあり方が非認知能力の獲得や愛着形成等、人間の一生の育ちや生活に深い影響を与えることを考えると、これからは、「０歳から15歳までを一体的に捉えた教育・保育のあり方」を意識して発達段階に応じた指導のあり方を工夫していくことが重要であることが分かる。

保育の無償化により、今後は保育のニーズがさらに増加することが予想される。そのため、複数の就学前施設から小学校への入学が顕著となり、子どもの学びを居心地よくつなぐための小学校教育への確かな接続、育ちや学びの連続性を図ることが急務である。また、幼児教育を終え、小学校に入学すると、小中一貫教育のスタートという認識で教育活動が営まれる。そこで、幼児教育・保育を通して育まれた５領域の内容を踏まえた「10の姿」を小学校教諭が共有し、「遊び」から「教科指導」を通してさらに育まれ、15年間を通して目指す子ども像へとつながっていくことを期待する。

引用文献

１）兵庫県豊岡市教育委員会.（2013）. 健やかな心と体を育む「豊岡の保育・教育スタイル」の提案：～運動遊び事業効果検証結果を踏まえて～.（p. 3）.

参考文献

豊岡市教育委員会.（2021）. 第４次とよおか教育プラン2021年度実践計画.

嶋野道弘.（2018）. *「学びの哲学」：「学び合い」が実現する究極の授業.* 東洋館出版社.

文部科学省.（2018）. *幼稚園教育要領解説.* フレーベル館.

汐見稔幸.（2017）. *保育所保育指針ハンドブック　2017年告示版.* 学研教育みらい.

無藤　隆.（2017）. *幼稚園教育要領ハンドブック　2017年告示版.* 学研教育みらい.

三池輝久. 木田哲生.（2017）. *「みんいく」ハンドブック：小学校４・５・６年.* 学事出版.